

問ふ、何なる經論に依って真言宗を立つるや。答ふ、大日經・金剛頂經・蘇悉地經並びに菩提心論、此の三經一論に依って真言宗を立つるなり。

問ふ、大日經と法華經と何れが勝れたるや。答ふ、法華經は或は七重或は八重の勝なり。大日經は七八重の劣なり。

難じて云はく、驚いて云はく、古より今に至るまで法華より真言劣ると云ふ義都て之無し。之に依て弘法大師は十住心を立て、法華は真言より三重の劣と釈し給へり。覚鑿は「法華は真言の履取りに及ばず」と釈せり。打ち任せては密教勝れ顯教劣るなりと世拳って此を許す。七重の劣と云ふ義は甚だ珍しき者をや。答ふ、真言は七重の劣と云ふ事珍しき義なりと驚かるは理なり。所以に法師品に云はく「已に説き今説き當に説かん、而も其の中に於て此の法華經最も為れ難信難解なり」云云。又云はく「諸經の中に於て最も其の上に在り」云云。此の文の心は法華は一切經の中に勝れたり。次に無量義經に云はく「次に方等十二部經摩訶般若華嚴海空を説く」云云。又云はく「眞實甚深甚深甚深なり」云云。此の文の心は無量義經は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり。然れども法華の序文にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり。次に涅槃經の九に云はく「是の經の世に出づる、彼の果実の一切を利益し安樂にする所多きが如し。能く衆生をして仏性を見せしめ、法華の中、八千の声聞記莖を受くることを得、大果実を成ずるが如く、秋収め冬蔵めて更に所作無きが如し」云云。籤の一に云はく「一家の義意謂へらく二部同味なれども然も涅槃尚劣る」云云。此の文の心は涅槃經も醍醐味、法華經も醍醐味。同じ醍醐味なれども涅槃經は尚劣るなり、法華經は勝れたりと云へり。涅槃經は既に法華の序分の無量義經よりも劣り、醍醐味なるが故に華嚴經には勝れたり。次に華嚴經は最初頓説なるが故に般若には勝れ、涅槃經の醍醐味には劣れり。次に蘇悉地經に云はく「猶成ぜざる者は、或は復大般若經を転読すること七遍」云云。此の文の心は大般若經は華嚴經には劣り、蘇悉地經には勝ると見えたり。次に蘇悉地經に云はく「三部の中に於て此の經を王と為す」云云。此の文の心は蘇悉地經は大般若經には劣り、大日經金剛頂經には勝ると見えたり。此の義を以て大日經は法華經より七重の劣とは申すなり。法華の本門に望むれば八重の劣とも申すなり。

次に弘法大師の十住心を立て、法華は三重劣ると云ふ事は、安然の教時義と云ふ文

に十住心の立て様を破して云はく「五つの失有り。謂はく一には大日經の義釈に違する失、二には金剛頂經に違する失、三には守護經に違する失、四には菩提心論に違する失、五には衆師に違する失なり」と。此の五つの失を陳ずる事無くしてつまり給へり。然る間法華は真言より三重の劣と釈し給へるが大なる僻事なり。謗法に成りぬと覺ゆ。次に覺鑿の法華は真言の履取りに及ばずと舍利講の式に書かれたるは舌に任せたる言なり。証拠無き故に専ら謗法なるべし。次に世を挙げて密教勝れ顯教劣ると此を許すと云ふ事は偏に弘法を信じて法を信ぜざるなり。所以に弘法をば安然和尚五失有りと云ひて、用ひざる時は世間の人は何様に密教勝ると思ふべき。抑密教勝れ顯教劣るとは何れの經に説きたるや。是又証拠無き事を世を挙げて申すなり。

猶難じて云はく、大日經等は是中央大日法身無始無終の如来、法界宮或は色究竟天、他化自在天にして、菩薩の為に真言を説き給へり。法華は釈迦心身、靈山にして二乗の為に説き給へり。或は釈迦は大日の化身なりとも云へり。成道の時は、大日の印可を蒙りて唵字の觀を教へられ、後夜に仏になるなり。大日如来だにもましまさずば争でか釈迦仏も仏に成り給ふべき。此等の道理を以て案ずるに、法華より真言勝れたる事は云ふに及ばざるなり。

答へて云はく、依法不依人の故に、いかやうにも經説のやうに依るべきなり。大日經は釈迦の大日となて説き給へる經なり。故に金光明最勝王經との第一には中央釈迦牟尼と云へり。又金剛頂經の第一にも中央釈迦牟尼仏と云へり。大日と釈迦とは一つ中央の仏なるが故に大日經をば釈迦の説とも云ふべし、大日の説とも云ふべし。又毘盧遮那と云ふは天竺の語、大日と云ふは此の土の語なり。釈迦牟尼を毘盧遮那と名づくると云ふ時は大日は釈迦の異名なり。加之旧訳の經に盧舍那と云ふをば新訳の經には毘盧遮那と云ふ。然る間新訳の經の毘盧遮那法身と云ふは、旧訳の經の盧舍那他受用身なり。故に大日法身と云ふは法華經の自受用報身にも及ばず。況んや法華經の法身如来にはまして及ぶべからず。法華經の自受用身と法身とは真言には分絶えて知らざるなり。法報不分二三莫弁と天台宗にもきはるゝなり。随つて華嚴經の新訳には或は釈迦と称け或は毘盧遮那と称けりと説けり。故に大日は只是釈迦の異名なり。なにしに別の仏とは意得べきや。

次に法身の説法と云ふ事、何れの經の説ぞや。弘法大師の二教論には楞伽經に依つて法身の説法を立て給へり。其の楞伽經と云ふは釈迦の説にして、未顯真實の權教なり。法華經の自受用身に及ばざれば、法身の説法とはいへども、いみじくもなし。此の

上に法は定んで説かず、報は二義に通ずるの二身の有るをば一向知らざるなり。故に大日法身の説法と云ふは定んで法華の他受用身に当たるなり。次に大日無始無終と云ふ事、既に「我昔道場に坐して四魔を降伏す」とも宣べ、又「四魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を満足す」等云云。此等の文は大日は始めて四魔を降伏して、始めて仏に成るとこそ見えたれ。全く無始の仏とは見えぬ。又仏に成って何程を経ると説かざる事は権經の故なり。實經にこそ五百塵点等をも説きたれ。次に法界宮とは色究竟天か。又何れの処ぞや。色究竟天或は他化自在天は、法華天台宗には別教の仏の説處と云ひて、いみじからぬ事に申すなり。又菩薩の為に説くとも高名もなし。例せば華嚴經は一向菩薩の為なれども、尚法華の方便とこそ云はるれ。只仏出世の本意は仏に成り難き二乗の仏に成るを一大事とし給へり。されば大論には二乗の仏に成るを密教と云ひ、二乗作仏を説かざるを顯教と云へり。此の趣ならば真言の三部經は二乗作仏の旨無きが故に還って顯教と云ひ、法華は二乗作仏を旨とする故に密教と云ふべきなり。随って諸仏秘密の蔵と説けば子細無し。世間の人密教勝ると云ふはいかやうに意得たるや。但し「若し顯教に於て修行する者久しく三大無量劫を経る」等と云へるは、既に三大無量劫と云ふ故に、是三蔵四阿含經を指して顯教と云ひて、権大乘までは云はず。況んや法華実大乘までは都て云はざるなり。

次に釈迦は大日の化身、唵字を教へられてこそ仏には成りたれと云ふ事、此は偏に六波羅蜜經の説なり。彼の經一部十卷は是釈迦の説なり。大日の説には非ず。是未顯真實の權教なり。随って成道の相も三蔵教の教主の相なり。六年苦行の後の儀式なるをや。彼の經説の五味を天台は盗み取って己が宗に立つると云ふ無實を云ひ付けらるゝは弘法大師の大なる僻事なり。所以に天台は涅槃經に依って立て給へり。全く六波羅蜜經には依らず。況んや天台死去の後百九十年あて貞元四年に渡れる經なり。何として天台は見給ふべき。不實の過弘法大師にあり。凡そ彼の經説は皆未顯真實なり。之を以て法華經を下さん事甚だ荒量なり。

猶難じて云はく、如何に云ふとも印・真言・三摩耶尊形を説く事は大日經程法華經には之無し。事理俱密の談は真言ひとりすぐれたり。其の上、真言の三部經は、釈迦一代五時の撰屬に非ず。されば弘法大師の宝鑰には釈摩訶衍論を証拠として、法華は無明の辺域、戲論の法と釈し給へり。爰を以て法華劣り真言勝ると申すなり。

答ふ、凡そ印相・尊形は是権經の説にして實教の談に非ず。設ひ之を説くとも権實大小の差別浅深有るべし。所以に阿含經等にも印相有るが故に、必ず法華に印相・尊形

を説くことを得ずして之を説かざるに非ず。説くまじければ是を説かぬにこそ有れ。法華は只三世十方の仏の本意を説きて、其の形がとある、かうあるとは云ふべからず。例せば世界建立の相を説かねばとて、法華は俱舎より劣るとは云ふべからざるが如し。次に事理俱密の事。法華は理秘密、真言は事理俱密なれば勝るゝとは何れの経に説けるや。

抑 法華の理秘密とは、何様の事ぞや。法華の理とは、迹門開権顕実の理か。其の理は真言には分絶えて知らざる理なり。法華の事とは、又久遠実成の事なり。此の事又真言になし。真言に云ふ所の事理は未開会の権教の事理なり。何ぞ法華に勝るべきや。

次に一代五時の撰属に非ずと云ふ事、是往古より争ひなり。唐決には四教有るが故に方等部に撰すと云へり。教時義には「一切智智一味の開会を説くが故に、法華の撰」と云へり。二義の中に方等の撰と云ふは吉き義なり。所以に一切智智一味の文を以て、法華の撰と云ふ事、甚だいはれなし。彼は法開会の文にして、全く人開会なし。争でか法華の撰と云はるべき。法開会の文は、方等般若にも盛んに談ずれども、法華に等しき事なし。彼の大日経の始終を見るに、四教の旨具に有り、尤も方等の撰と云ふべし。所以に開権顕実の旨有らざれば法華と云ふまじ。一向小乘三蔵の義無ければ阿含部とも云ふべからず。般若畢竟空を説かねば般若部とも云ふべからず。大小四教の旨を説くが故に方等部と云はずんば何れの部とか云はん。又一代五時を離れて外に仏法有りと云ふべからず。若し有らば二仏並出の失あらん。又其の法を釈迦統領の国土にきたして弘むべからず。

次に弘法大師、釈摩訶衍論を証拠として、法華を無明の辺域・戲論の法と云ふ事、是以ての外は事なり。釈摩訶衍論とは、竜樹菩薩の造なり。是は釈迦如来の御弟子なり。争でか弟子の論を以て師の一代第一と仰せられん法華経を押し下して、戲論の法等と云ふべきや。而も論に其の明文無し。随って彼の論の法門は別教の法門なり。権経の法門なり。是円教に及ばず。又実教に非ず。何にしてか法華を下すべき。其の上彼の論に幾の経をか引くらん。されども法華経を引く事は都て之無し。権論の故なり。地体弘法大師の華嚴より法華を下されたるは遥かに仏意にはくひ違ひたる心地なり。用ゆべからず用ゆべからず。

日 蓮 花 押